東京格致会会報

第6号
1998年9月
発行人・平田耕司
編集人・友広　寿

本号の内容

・支部総会を盛り上げよう　平田耕司
・同窓会のさらなる充実を　寺川俊昭
・母校の近況報告　福永恭司
・五十三年振りの感激　藤浦教隆
・想い出のメキシコ　渡辺昭典
・忘れられないこと　木山正義
・〈格物史観〉ということ　坂井昌彦
・楽しきかな同期の集い　村主恭敏
・セカンドステージ雑感　増山宏昭
・一番楽しい格致会コンペ　生田八洲紘
・会長杯戴き　森沢　進
・格致会コンペに参加して　合田良三
・不注意な旅　田渕統洋
・格致中学校同窓会だより（昭18入学組）
・本年度総会の案内（その他お知らせ）

支部総会を盛り上げよう

会長　平田　耕司

同窓各位におかれましては益々ご健勝でご活躍のことと思います。昨年十一月、私達の母校庄原格致高校が創立百周年という輝かしい歴史をきざみ、その式典へ参列し多数の参列者の中で感激した一人であります。

その百周年行事に際し、同窓会本部又私からも大変なお願いをいたし、それに心よくご賛同ご協力を賜わりまして目標にしていた募金額を見事に達成できましたことを感謝しあらためてここに御礼を申し上げます。期日少し前までは、きびしい状況下にあって多くの方々からご心配をいただきましたが各位のご理解とご努力のおかげをもって達成できた次第でございます。特に東京格致会のその活動と会員各位のご協力に対しては本部からも感謝の意をいただき誠にご同慶の至りであります。

私は記念祝賀会で、同窓会の各支部を代表して祝辞をのべる機会をいただき、その中で現在の東京格致会の活動状況など話しました。

現在首都圏へ九百余名の同窓の方がおられ各方面で活躍されていること、そして年一回総会を開催し多くの先輩や若い人達と共に古里のこと在校中でのこと、或は現況などにぎやかな中で楽しいひとときをもっていることなど、更に母校からご出席の校長先生や同窓会長のお話で最近の母校や古里の状況を知ることができ、それは遠く古里を離れ生活している私達にとって大変有難い場でもあることを話しました。

私は昭和二十年卒の首都圏居住同級生と年三、四回会合を持ち楽しんでいますが常々このクラス会の延長が同窓会総会になればと思っています。同窓会で先輩、後輩の中で話の巾が広がり或時は話題が親、兄弟、隣近所にまで及びクラス会とは異って思わぬつながりを知ることがあります。「クラス会から同窓会総会へ」を呼びかけ総会参加者を広げてゆきたいと思っています。そのために東京格致会の運営等をお世話いただく「幹事」を各卒業年度から一～二名ご参加いただきたいとかねてよりお願いしています。

本年の東京格致会総会は後記のとおり十月三日開催いたします。同級の方々への呼びかけていただき多くの方のご参加をお願いする次第であります。（昭和二〇年卒）

同窓会のさらなる充実を

同窓会会長　寺川　俊昭

東京格致会の皆様

昨年十一月二日に催しました母校の創立百周年の記念祝賀会に際しましては、会員の皆様には、記念事業のために多額のご寄付を賜わりまして、本当に有難うございました。お蔭さまで、記念事業費はほぼ目標額を達成し、生徒たちの憩いと語らいあいの記念庭園は、「坦懐の園」と名づけられて美しく完成し、同窓会館もレフレッシュされて、生徒たちのクラブ活動や福利のために活用されております。後輩の諸君のために、大きな贈物ができたことを、すべての同窓の皆様とともに喜びたいと存じます。

祝賀会を終えて、百周年記念事業実行委員会はその任を終えましたが、なお残務整理や継続する仕事を担任し、それ以上に同窓会活動のより充実した発展を期して、実行委員会の事務局を中心とした方がたに、運営委員会をお願いし、精力的にその仕事に当たっていただいています。その中で、百周年を期に各支部の結成や、支部活動や同期会の会合などの同窓会活動がずいぶん盛んになってきておりますが、それに応えて、本部の充実つまり同窓会全体の運営について、継続する責任体制を整えなければとの意見が、年会費をお願いすべきではないかという積極的な意見とともに、出されております。早急に体制を整えて、同窓会の一層の充実をと期しておりますので、東京格致会の皆様にもどうか充分のご理解と激励をお寄せくださいますよう、お願い致します。

東京格致会会長の平田さんと私は、たまたま同期で、昭和二〇年、敗戦の直前、旧制格致中学校を四年で卒業した学年です。五月の三日間、同期の広田さん（元京都府警署長）にお世話になり、京都に古稀記念の修学旅行（？）を行いました。実に楽しい三日間でしたが、旧制中学・新制高校に学ぶ頃は、ちょうど青春の始まる頃、人生の基礎を培う物思う年頃ですから、格別思い出が深いと感じます。

それぞれの世代に独特の経験があり、格別の懐旧がありましょう。時に旧友あい会し、人生を語り、郷土と母校を語り、また時勢を論ずることは、人生の楽しみというべきでしょうか。

ともあれ、東京格致会の一層の発展と、会員の皆様のご健勝とご活躍を、心から祈念申し上げます。（昭和二〇年卒）

母校の近況報告

広島県立庄原格致高等学校校長
福永　恭司

この度、ご勇退の東泰治校長先生の後を受け新しい伝統づくりをスタートする機会を与えていただきました。

昨秋には学校創立百周年記念事業が同窓会の皆様方により成功裡に成就される等輝かしい伝統と母校に寄せられるご支援、地域社会や生徒保護者からの格致教育にたいする期待を考えあわすと、責任の重大さを痛感し身の引き締まる思いがしています。

桜が満開の四月、年配の方がカメラを片手に校庭を散策し「坦懐の園」にも立ち寄り「これが記念庭園ですか、きっと私のような歳になると、青春の日々を懐かしみ自然に母校へ足が向きますよ。格致はいいですね。」と語りかけてこられました。百周年事業に帰郷の機会が取れなく暖かい春をまちわびて実家に兄弟を訪ねられた方でした。遠くに住まれれば懐かしく心にうかぶ情景の一つだと思います。

さて、本校ではサッカー、ラグビー用の第二グランドの建設を求め広島県及び庄原市行政関係に同窓会、PTAと共に働きかけ、百周年記念にむけ完成をめざしてまいりました。予定より多少遅れましたが、今秋にも完成する運びとなりました。同窓会でも記念事業の一環ととらえご支援いただき、生徒会、PTA、教職員と共に協力して記念にのこる落成式を行うよう準備しています。

「格物致知」の理念は現在の生徒にも脈々と引き継がれ、学習活動は勿論のこと放課後にはクラブにほぼ全生徒が所属し自らを鍛えています。教職員も全員が必ず週に一度は一斉に指導に当る日を定め生徒と共に汗を流しグランドが狭く感じるような状況です。その結果、県高校総合体育大会（三次地区大会）では十二クラブ中九クラブが県大会に出場権をえて全国大会出場を目標に練習に励んでいます。第二グランド完成がさらに刺激となりサッカー、ラグビーはいうに及ばず、クラブ全体の活動が活発になると確信しています。また、文化系のクラブでは吹奏楽部が創部四十五周年にあたる今年、OBも招き記念演奏会を八月に開催する計画で練習に励み、早朝より登校し腕を磨いております。県内でもユニークな邦楽部も発表に加わる予定です。

昨年度の進路状況ですが、それぞれが目標を設定し主体的に取り組み広島大、早稲田大、大阪女子大、九州工大、立命館大、広島県大、長崎大、芝浦工大、山口大、名古屋市立大、鳥取大等百七十三名（過年度含む）の者が大学進学を果たし四十数名の者が専修・専門学校に進んでいます。

最後になりましたが、東京格致会の皆様のご活躍とご健康を祈念いたしますとともに、母校への一層のご支援をお願い申し上げます。

お知らせ

○東京格致会「会員名簿」
（平成九年九月二十日現在）
一冊　千円
首都圏居住者の卒業年度・住所・職業・出身地等の最新情報記載、一〇四頁

○庄原格致高校創立百周年記念製作
「校歌、学生歌等カセットテープ」
一個　千円
校歌・学生歌・応援歌など九曲収録、クラス会などで好評

希望者は左記宛、現金送付してお申込み下さい。

〒253－0012　茅ヶ崎市小和田一－三二－七
明賀　馨（事務局長）
TEL　〇四六七－五一－〇六七三

五十三年振りの感激

昭和二〇年卒　藤浦　教隆

平成十年五月十一日、私達昭和十六年四月格致中学校（旧制）に入学した同級生が、関東地区平田耕司君の凄い熱の入れかたで各方面に「古稀記念京都旅行」を呼びかけ、その結果関東地区七名、関西及び以西から九名、合計十六名が参加し、京都東山三十六峰の一角にある「洛陽荘」で五十三年振りの旧友を囲む楽しく愉快なクラス会となった。午前十一時半京都駅前に集合した私達は、あの頃の思い出を胸に込め、息をつまらせていた。顔に覚えのある者、無い者、顔と名前が一致せずなかなか思い出せない者もいてとまどいも大きかった。五十年余の空白を感じた次第。

然し間もなく顔や名前を思い出し大きな声で名前を呼びかわし、抱き合わんばかりに再会を喜んでいた者、中には感涙する者さえいた。それを目の前で見た私はこれこそ本当の旧友であると感銘した。そして東本願寺、東寺等を拝観したあと宿舎に入って、元大谷大学学長寺川俊昭君から庄原出身の偉大なる文士倉田百三について誠に貴重な話を聴くことができ、これなどは今回のクラス会のユニークさを示し、同時に寺川君が同級であることの有難さを知った。

いよいよ本番の宴会となり、自己紹介で、中学時代の学徒勤労動員や学徒出陣など、又終戦後の食糧難時代を乗り越え、各方面で種々な職業に就いて活躍の結果、小中学校長、税務署長、警察署長、会社役員、社長等の経験者、画家、司法書士、自営者、或は寺川君のように元大学学長、そして大学教授等さまざまであった。その自己紹介は各自淡々とした口振りであったが、社会の為、家族の為にと五十年の長い長い年月を考えればそれぞれ大変であったろうと思った。

それにしてもいずれも七十才を越えた者とは到底思えない元気者で、よく飲みよく食べそしてよく話した。

翌日十二日は全員で、平安神宮を最初に東山一帯の社寺史跡を見学（南禅寺、知恩院、清水寺、三十三間堂まで徒歩）した。

これからの私達は心身の健康が第一。「お互い頑張ろう」を合い言葉で感激の二日間（関東組は三日間）を終えることができた。本当に有意義なクラス会であった。

（京都市在住）

想い出のメキシコ

昭和二〇年卒　渡辺　昭典

農林水産省を定年退職して直ぐにメキシコ養蚕開発技術協力のため、思いもしなかった遠い異国の地へ渡ることになった。恥ずかしいことにそれまでこの国の歴史や国民性など殆ど知らないままに渡航し、当国はもとよりスペイン語を話す国が二十ヵ国もありそれが世界の公用語の一つであることすら知らなかった。

メキシコ合衆国は日本の五倍強の広大な国土を有し、資源の豊かな国である。歴史は古く、有史以前から幾多の民族が独自の文化をもって栄え、南部で高い文明を築いたマヤ帝国、中央高原で続いたテオティワカン、強力な帝国を築いたアステカなどが広く知られており、その遺跡の多さ、緻密な石彫、天文学的知識などには目を見はるものがあった。

日本とメキシコの関係は一七世紀前半に支倉常長がローマへの途次に訪れたことに遡るが、一八八八年にはわが国が欧米諸国と締結した最初の修好通商条約がメキシコと結ばれている。戦後も同国は英国に次いで二番目に対日平和条約を批准している。

日本人のメキシコ移住はラテンアメリカで最も古く、榎本植民団の移住に遡り、昨年日本でもその百周年記念切手が発行されて

いる。現在日系人は約一万人とみられているが、日本人のまじめさは評価され信用を得ているという。私達もこれらの方々から親身の協力、支援を得て大いに助けられたことは忘れられない想い出である。

さて、私の任地はサンルイスポトシ市で標高一八九〇メートルの乾燥地でサボテンの自生地として知られるところ。冷房も暖房もなくて生活できる快適な土地柄であった。技術協力の内容は繭生産の手だてを教えることであったが、その詳細は省略させて貰う。有望であるが現在の国情もあり、先のことはどうなるか？ 中進国といわれているが農民の貧しさは何とかならないものか。何らかの形でこの技術協力の役立つ時がくればと希うのである。

五年の滞在で日本にはないこの国の良さもいろいろ教えられるものがあった。日々を陽気にふるまい日本に親しみをもってくれるこの国の人々の上に幸せ多きことを希って止まない。

忘れられないこと

昭和二一年卒　木山　正義

昭和十年代は初頭から日に日に戦争体制が強化され、軍事的色彩が濃くなっていった時代だった。教育の面から見れば、昭和十六年四月小学校は「国民学校」と改称され、教科内容の変化とともに軍国主義教育が実行されていった。同年十二月八日太平洋戦争勃発、ハワイ真珠湾奇襲攻撃の大戦果に酔いしれた日本であった。

ぼくはこのような時代の昭和十七年四月格致中学校に入学した。通学は西城駅から庄原駅までの汽車通学である。なんだか急に大人になったような気分で、毎日の汽車通学は楽しかった。

さて、太平洋戦争は日増しに激化し、学童疎開や勤労動員などによって教育の正常な機能は停止され、軍事教育が特に重視されるようになった。今も記憶に残っているのは「軍事教練」という課目が正規の授業時間に組みこまれ、行進練習や木製の銃剣で銃剣術の練習をしたりしたことだ。「欲しがりません、勝つまでは」を合いことばに、お国のためにと国民生活の全てが戦争の方向へ向いていたのである。

しかし、戦局はますます不利になり、遂にいたいけな子どもたちまで戦に駆り出す方策を打ち出したのである。「陸軍少年兵」「海軍飛行兵」の募集がそれである。受験資格は十四才から十八才まで。丁度その頃「西住戦車隊」だったか「西住戦車長」だったか題名がはっきりしないがその映画を観ていたく感激し、ぼくは体が小さいから戦車兵に向いているなと考えた。ぼくはお国のために戦車兵になろうと決心し、十四才になるのをまって親には内緒で出願した。しかし受験直前に親の知るところとなり、父が「二十才になればみんな兵隊さんになるのだから」とぼくを諭し、受験を取り下げに行った。皇国教育は、ぼくのような少年の心にもしっかり刻み込まれていたものだと痛感する。

ぼくにとって母校の思い出は、学校そのものより在学中の出来事、特に陸軍少年兵への応募のことが忘れられない一こまである。

●随想●

《格物史観》ということ

昭和二四年卒　坂井　昌彦

最近ある書評誌で《格物史観》なる言葉に遭遇した。母校の名称のルーツに直接かかわっているので見過ごすわけにはいかなかった。

それは早稲田大学の川勝平太教授の提唱によるもので、「自然科学と人文・社会科学をつなぐもの」として、歴史はもはや人文・社会科学の独占物ではなく、「人と自然界の両方を視野に入れた歴史」であるべきだということを言っている。

マルクスの思想は《唯物論》といわれるが、奇妙なことにマルクスは物自体については語っていないのである。マルクスが土台としているのは人間が生きていくためにとり結ぶ経済関係であり、それが他のすべての人間の在り方を規定するというものである。人間を中心にして社会を理解しようという態度はヨーロッパの文化風土なのであろう。「物」を包摂する視点を欠いている。

それに対して日本には「茶の歴史」とか「米の歴史」というように、物に即して歴史をみる史観がある。それを徹底すれば、「物」に対する態度も、使い捨ての人間中心主義を脱して、「物」を大切にする姿勢を生むであろう。人に直接問いかけるのではなく、むしろ自然界・人間界のさまざまな「物」を「格（ただ）し」、「物」に「格（いた）る」ことによって人間を理解するという史観をうち立てる時期にきているのではないか、というのである。

地球はエネルギーの出入りについては宇宙に対して開かれているが、物質の出入りがない。宇宙から地球を眺めると、すべての物が地球という星のなかで形を変えて循環しているだけである。地球上の人間は物の形を変えて利用して生活している。それは地球の物質循環の一部である。それをとらえる知的パラダイムは真正の唯物史観といってもよいであろう。しかし俗流の唯物史観は人間中心史観であるから、それと区別するために《格物史観》と名付けておこうというのである。

「物」は人間の存在条件であり、人間は「物」を活用しつつ、「物」によって生かされていることを認めることが大切であろう、と結んでいる。

楽しきかな同期の集い

昭和二九年卒　村主　恭敏

光陰は矢の如く、少年は老い易し。比婆西高等学校を卒業してはや四四年の星霜が移った。平成七年十一月還暦に達した時はさほどにも感じなかったが、昨今冒頭の辞句を痛感することしきりである。

昭和三六年社会に出てより、高度経済成長、二度の石油ショック、低成長、東西冷戦終結、経済バブル化とその崩壊、そして今ビッグバンという激動の中に社会生活を送ってきて、そろそろ軟着陸態勢に入る時期に到達していると思う。それにつけてもこれまでの間、比婆西同期の諸君との交流がずっと続いていることは、実にうれしい限りである。

昭和二九年普通科卒二一〇名ほどのうち、首都圏在住者三四名、恩師渡邊武臣先生（昭和二〇年格致中卒）のお名前も載せて

母校名の「格物致知」は周知のとおり『大学』に見える言葉で、「格物」については俗に七十二家の異説があるというが、一般的には宋の朱子と明の王陽明の二家の説で代表されている。（以下、岩波書店『楽しむ四字熟語』より抜粋引用）

朱子は「物に格（いた）り知を致（いた）す」とよませ、事物に即して事物の理をきわめ、その究極点にまで行き着くことだと説く。一方、王陽明は「物を格（ただ）し知を致す」とよませ、「物」とは外界の事物一般ではなく、関心が向けられる対象をさす。「知」も一般的な意味での知識ではなく、孟子のいう良知をさしている。

朱子学は「理学」とよばれ、知識の獲得を尊重する主知主義とみなされ、陽明学は「心学」とよばれ、道徳的実践を重んじる唯心主義とみなされているが、「格物致知」の理解にも、その違いがよく表れている。

名簿ができている。およそ四〇年近く前だったか、確か小川尚志君と今は高町に帰った宮本英暉君が世話人となって同期会が始まり、今に至るまで連綿として続いている。渡邊先生はほとんど毎回出席して下さって、恩師にして同期生といった感さえあり、感謝している。

平成二年夏、掛田洽典君、半澤文枝さんが幹事で全国の有志に呼びかけ、函館、登別、札幌と三泊四日、初めての全国大会を催し、二〇名強が参加した。その後、宮島、吾妻山、京都と各地区が幹事で旅行会を開催、最近では昨年五月三一日～六月二日東京大会を催行した。還暦後初めての全国大会で、徳政義行委員長、栄敏男事務局長、宮本一夫会計を中心に一〇数名の体制で鋭意取組み、初日は浅草ビューホテル泊、二日目はバス旅行で横浜ランドマークタワー、鎌倉大仏、鶴岡八幡宮等を見学拝観ののち熱海後楽園ホテル泊、翌朝現地解散という日程を、絶好の天候に恵まれて盛会裡に終了することができた。参加者は渡邊先生と庄原在住の木村一夫先生を加えて庄原、広島、関西、関東その他から五六名という大勢であった。

次回は荒田篤蔵君、堀井洋介君達を幹事として広島大会と決っており、今から楽しみに鶴首している次第である。

セカンドステージ雑感

―生活者として　夫婦でどう暮すか―

昭和三〇年卒　増山　宏昭

我々の人生は、入学、就職、結婚等、節目となる出来事で区切られている。人生の一つの大きな節目でもある定年退職は、「仕事からの引退」であり、生活の再構築が迫られるものである。高度経済成長を支えて来た一員であると云う自負心、会社を引張って来たと云う満足感、金儲けと効率を目標とした「会社人間」から、人間の人間として最大、最低の任務である生きる事＝生活して行く事＝それは掛けがえのない自分自身の人生を、豊かに切り開く日常生活者としての「生活人間」への脱皮であり、「粗大ゴミ」とか「濡れ落葉」と呼ばれない生活への再構築を考える。

「生活人間」とは自立した生活を送っている人であり、自立した生活者とは、(1) 個人としての自立＝健康維持、趣味、(2) 家族からの自立＝炊事、洗濯、掃除、家事管理をこなす生活、(3) 地域社会に於ける自立＝住民活動、市民活動、ボランティア等への参加と、三つの自立がバランス良くとれた生活者であり、この様な生活者は「粗大ゴミ」と呼ばれない筈だ。

我々の年代は、結婚以来、「夫は仕事、妻は家庭」と役割分担し、妻は専業主婦を選び、土日曜、祭日以外のウィークデーは、束縛のない自由な生活パターンが出来上がっているので、ある日を境に毎日が日曜日の生活は、束縛と息苦しさを感じ、せめて昼食ぐらいは夫の心配をしないで済ませたい願望があるとの事。従って夫は積極的に社会参加して、外出を多くし、今迄通りの専業主婦を独断と偏見で期待し、夫は夫、妻は妻、それぞれが自分自身の生活をして、共有する時間は30％程度にして、それぞれに70％の世界を別にすれば「濡れ落葉」と呼ばれない生活が出来ると考える。

価値観、人生観は人それぞれ異なるが、これからは、〝呆けないで、好きな事を、好きな時に、気の合った仲間と好きなだけする〟をモットーにした、小生の、現在の日常生活のパターンは、「会社人間時代」とは全く無関係の上下水道工事店でのアルバイト週二日、約十人程度の異業種定年退職者と約7畝の畑を借りての野菜作りの農作業週一日、を軸として、ゴルフや近くの医療センターで健康体力作りトレーニング、団地や町内会活動等の近隣住民活動、身近な生活上の、くらし、まちづくり及び環境ゴミ等の市民活動への参加、夫婦での小旅行と日帰ハイキング等を組合せ、選択して、休日は週一日程度設け、これを実践し、定着させて来た。そして家事は殆どしないで、頼まれたゴミ捨て等を協力し、「会社人間時代」は不可能と感じていたウォーキング、一日一万歩(1.5H)を毎日実行し健康維持に努力している。

そしてこの日常生活パターンを五年に一回見直して、次の五年の〝生き方〟〝暮らし方〟を決めるサイクルを実行して行きたいと考えている。

一番楽しい格致会コンペ

昭和三三年卒　生田　八洲紘

私が参加させて貰っておりますゴルフコンペの中で一番楽しみに待っているのが、年二回行われます東京格致会ゴルフコンペです。この会では我々三三年卒組は若手の方ですが腕は諸先輩に歯がたちません。

この伝統あるコンペに三三年卒組からも是非優勝者を出そうと森沢、合田と共に猛練習をして臨んでおります。何事にも準備の良い森沢は優勝のスピーチまで用意して出かけております。今回（一の宮カントリークラブ第十六回大会）初めてペリヤ方式なるルールに助けられ、幸運にも私が優勝させていただき感激しております。残念ながら合田はカナダ旅行のため今回参加できませんでしたが、いつものように森沢と生田は同じパーティで出場しデッドヒートを演じました。前半アウトコースでは森沢が一ストローク・リードで折り返しましたが昼休のコンデション調整に失敗し（めずらしく日本酒を一本に控えておりました。）後半インコースで僅かリードした生田が優勝させてもらいました。したがってこの優勝は三三年卒組の初優勝であると思っております。優勝したとはいえ、スコアはまだまだはずかしい限りで、早く大先輩のレベルに追いつきたいとお互いに励し合いながら練習に精を出しております。今後とも足腰を鍛えて毎回参加させて貰うつもりでおります。なにとぞよろしくお願い申し上げます。

会長杯戴き

昭和三三年卒　森沢　進

秋酣の平成九年十月十八日(土)、恒例東京格致会第十七回同好ゴルフコンペが晴天下の千葉一の宮カントリー倶楽部で四組十六名参加して行なわれ、図らずも不肖私が優勝の栄誉を授かりました。

転勤族だった私も近年やっと鎌ヶ谷市に定着し、同窓の集いである東京格致会に入れてもらい、又、年二回のゴルフ会にも同年次（三三年卒）の生田、合田両君が、かねてより参加していたよしみで、一緒の組でプレー出来る気楽さもあり、参加する様になってから四回目の今回、新ペリア・ルールに助けられ優勝と同時に、今回たまたま格致会会長杯のカップ取り切り戦でもあった為、カップを高々と揚げ記念写真におさまる幸運を得た次第です。

ゴルフ生活の句読点となり、人生に一つ又思い出を増す事ができました。

ゴルフを始めて二十年余り、全国各地で色々なパートナーとプレーを楽しんで来ましたが、方言交じりの同郷、同窓の気のおけない仲間とのこの会のゴルフには又一味違った楽しさがあります。加えて、皆なと同乗して帰るJR車内での懇親も格別です。

スコアーを縮めるだけのゴルフには限界あり、人間関係を深めるゴルフに限界なし、と言われます。これからも都合の着く限り参加し、下手なゴルフもルールと運に恵れれば次なる優勝も可能かと自惚れています。

前回は生田君が優勝し、奇しくも三三年卒の連勝で、次にこの壁を破るのはどの年次か楽しみです。

次回の幹事役と成りましたので、改めて首都圏ジャングルで孤軍奮闘、時に望郷の念にかられながらも頑張っている老若男女の同窓の皆さんに、格致会と、ゴルフコンペに奮って参加される事をお待ち致しております。

格致会コンペに参加して

昭和三三年卒　合田　良三

去る五月十六日、室伏孝一先輩のメンバーコース宍戸カントリー倶楽部（茨城県）西コースに於て、第十八回東京格致会ゴルフコンペが晴天のもと開催されました。

コースはベントのワングリーンで池と樹木が戦略的に効いており距離もたっぷり、各ホール毎のデザインが異なり、皆さん腕相応に楽しめたと思います。

私は第十二回目が初参加でブービーなどで入賞はほど遠いもので、二十年代卒のパワーに刺激を受け参加する事に意義を感じておりましたが、今回新ペリアでHDCP33をいただきネット76で優勝となりました。

人生最低三つの坂を乗り越えると言われております。一、登り坂　二、下り坂　三つ目真逆（マサカ）があります。

私の第十八回の優勝は真逆にあたりますが、この優勝で第十六回生田八洲紘、第十七回森沢進と連続三回三三年卒で優勝を飾ったことになります。

参加出来なかった十名の方より近況がよせられました。

・転職・腰痛・年六十回プレー・会社業界のコンペ参加・近所でプレーを楽しんでいる・平日の開催希望など、そして幹事さんへの労いの言葉でした。

多くの人の参加でこのコンペの輪がもっと大きくなるように願っています。

不注意な旅

昭和三五年卒　田渕　統洋

最近（四月）、業務により旅行事情調査のため香港へ出張する機会がありました。

香港は久し振りの訪問でしたが、特に香港島北側超高層ビルがどんどん増えている状況は、一見ニューヨークの摩天楼を想い起こさせる程の感がありました。

九龍側は30年前あるいは10年前と比べても余り大きな変化はなく、ネイザン通りを中心として尖沙咀（チムサチュイ）界隈は昔と同じように昼夜ともに大変な人込みで、相変わらず街はごった返しています。

ところが、昨年（一九九七年）七月一日に香港がイギリスから中国へ返還されてから、世界からの香港への旅行客が減少しつつあるのです。特に日本からの旅行者数は、返還前は毎月九万人前後でしたが、今年は月間五万人程度と半減に近い状態です。

香港は返還後、50年間は従来の自由主義経済の維持を中国政府は保証していますが、社会体制が変わったとたんに観光という面では急激に魅力を失っているのです。

七月六日にはランタオ島の北西部にチェク・ラップ・コック新空港が開港となり、年内には二本目の滑走路がオープンする予定になっています。

従来は着陸の度に乗客はヒヤヒヤものであった啓徳空港は閉鎖されました。

少し前置きが長くなりましたが、職業上、旅慣れてもおり、若い頃には冒険心から種々の危険な目にも会い、旅行客相手の犯罪のさまざまな手口を承知している積りであり、旅行のプロとも内心自負しておりましたが、今回、不覚にも香港人の旅行者相手のプロにまんまとハメられてしまったのです。

こういう手口も世の中（少くとも香港）にはあるということをお話します。

午前10時頃、宿泊先のホテル日航を軽装にて一人で出かけ、九龍東部のオフィス街と西のネイザンロードの方向へ歩いておりました。

およそ400メートル位進んだところで両側は公園風の広場があり、正面には正に香港らしいビジネス街が見える大きな交差点（チャタムロード）へ差しかかりました。

たまたま付近には人影はほとんどありませんでしたが、交通信号は赤だったため、じっと立ったまま信号が変るのを待ちました。

やっと青になったので、歩道から車道に降りて横断歩道を渡り始めたところへ、私の右後方から突然現れた緑色の日本製のきれいな乗用車が左折するため、歩行中の私の右膝に車のバンパーの左前コーナーをジワーと当ててきました。

ビックリした私は車から離れるべく、とっさに左後方へ後ずさりしようとしました。すると丁度私のすぐ後ろを歩いていたと思われる人が私の体の後背部にぶつかってきました。

従って私を含めて二人の男が右前の車にグイグイと押される格好となり、二人はもつれるようにして、やっとのことで何とか車から逃がれました。

ヤレヤレ、怪我をしたり、交通事故にならなくてよかったと、ホッとしながら本来の方向へ私は歩き始めたのです。

交差点を渡り切り、さらに50メートル位進んだところで、何げなくズボンの左後ろのしっかりとボタンが留めてあったはずのポケットに手を当ててみたのです。

何と、ボタンは外れており、ポケット内に深く入れていた二つに折り曲げた小型封筒がないではありませんか！　ヤラレた!!　封筒の中には日本円の現金五万円を入れていたのです。ホテルの部屋を出る際に、ポケットの底に深く入れたはずの封筒がない！　何故なのか!?

ハッと頭に閃いたのが先刻の車が接触してきたと同時に、後ろからぶつかってきた男の犯行に違いないと思い至ったのです。

すぐ先程の交差点に戻ってみましたが、緑色の車は勿論、私にぶつかったらしき人物も見当りません。

後刻、香港治安当局の話によりますと、比較的新しいスリの手口で、運転をする者と歩く者による二人組の犯行とのことでした。現行犯でないと逮捕しても無意味に終わるとのことで、現金だけの被害で済んだことはラッキーであるとの説明でした。

幸か不幸か五万円という現金が、とにかくまんまとスラれ、二人組にはあっと言う間によい仕事をさせてしまったこと、さらには日頃、旅行をされるお客様には安全のための注意を促す立場にある者が、自らヤラレてしまうとは誠に情けない話ではありますが、うかつであったことを反省するとともに、同じ被害に遭遇されないよう一例をご紹介しました。

観光や出張等で、海外旅行や国内旅行をされます際には、もしよろしければいつでもご相談にのります。

旅行に関してお伝いできれば幸いに存知ますので、ご遠慮なくお電話を下さい。

尚、当社のパッケージ旅行（赤い風船等）であっても他社のもの（例えばジャルパック等）であってもご相談にのれますので、よろしくお願いします。

基金（本会運営基金）の報告

「無償の株主、一口一万円・締切り設けず…」と会員の皆様にPRを致して参りましたが、平成九年度（H9・8・1～H10・7・31）にご賛同を得まして、次の方々から、お寄せ戴きました。（◎今回は紙面の都合上、平成九年度のみの発表と致します。）

［基金出資者ご芳名］（卒業年次順）

平田耕司	20年	西村　充	26年
安永清登	22年	室伏喜多子	30年
信永利馬	24年	青木辨三	30年
長谷川敏忠	25年	吉岡公義	35年
金森裕雄	25年	中村正昭	35年

《格致中学校同窓会だより》

琵琶湖畔、五〇年ぶりの再会

―昭和一八年入学の仲間が元気に集まった―

六月下旬の日曜日…。小雨そぼ降る湖西線《堅田》駅の改札口に、三々五々、どこか見覚えのある初老の男たちが集って来た。長い歳月が少年時代の面影に微妙な変化をもたらしてはいるけれど、じーっと見つめていると、眉根のあたり口許のあたりに記憶にインプットされた表情が浮かんでくる。何気ない仕草もそうだし、喋っているうちにまた声音に聞き覚えのあるトーンが響いてくるではないか。

「ひょっとして、お前さんは……?」と、一気に古いセピア色の写真のような、あの格致中学時代にタイムスリップしてしまう。

広島・庄原組の田部・安藤・遠藤・山本たちが現れた。関西組の井上・城・村木たちが顔を出した。関東組の森戸・名越・山田らが到着した。堅田駅のホールに時空を超えてワープして来た面々は、みな思考の焦点が定まらないのか、しばし陶然たる面持ち。

三時半。世話人のひとり岡村（完道）和尚が、例のごとく飄然と出現。ホテルのバスを率いて迎えに来てくれたのである。

期日……一九九八年六月二一日（日）
会場……メイテツマリーナホテル
　　大津市堅田一―二一―一
参加者…合計二九名（氏名は省略）

宿には藤井（高橋）、末信の両幹事が待ち受けており、直行組の高野、国原が合流してきた。早速パノラマ大浴場に浸り、小雨に煙る比叡の山並や対岸の黄昏の移ろいを楽しむ。われわれの出会いはすべて昭和一八年四月ではあるけれど、別れは二三年、二三年、二四年とそれぞれ異なっている。それがてんでばらばらに散って半世紀後の今日、また結集することができたのである。これは一つの事件といえなくもない。

帰郷しても親はあらかた世を去っているし、故郷の山河は目を離しているうちに見るも無残な変貌ぶりだ。今やわが旧友だけにしか故郷の要素が残っていないといってよいのかもしれないね。ま、年寄りのセンチメンタリズムといって笑われてもいいか。

いよいよ開宴―。藤井幹事から挨拶代わりに、われらが歩んだ人生の時代背景の総括があった。出生のころの世界大恐慌、そしてまた現在の日本発の大不況。スタートのみならず、途中で原爆投下と敗戦、そしてゴール間近になってまた凄い不景気という、まさに踏んだり蹴ったり。われらが人生はいったい何であったのか。しかし、さりとて初めから終わりまで、べったりとすべてが不幸せであった訳でもない。平和憲法は手にしたし、神武景気に岩戸景気、そして新幹線を走らせて東京オリンピックも目の前で見物できたから、ま、それなりに良しとするか。

それにしても連中、みな元気だ。一筋縄ではいかないね。恐ろしい飲みっぷりだ。あとで幹事に訊いたら、概略ビール（大）九〇本、お銚子九〇本、ウィスキー数本とのこと。精神年齢のほうは正確には分からないけれど、肉体年齢だけは戸籍年齢を大幅に下回っていることは確実のようだ。

明けて二二日。雨はすっかり上がって、湖岸の景色が色鮮やかにくっきりと見える。

温泉で酒精分をきれいに洗い流して元気を回復した一同は、《浮御堂》の見学へ。ここはお馴染み一休禅師の属する臨済宗大徳寺派の海門山満月寺の湖上に突き出したお堂で、《阿弥陀仏一千体（千体仏）》が安置されている。芭蕉の句碑「鎖（じょう）あけて　月さし入れよ　浮御堂」もあった。

昼前に再び堅田駅に集結。再会を期して東西へと散って行った。再見！

（昭和二四年卒）　坂井　昌彦

平成十年度総会の御案内

本年度東京格致会総会・懇親会を左記により開催致します。万障お繰合わせの上、是非共出席下さいますようご案内申し上げます。本年は、昨年母校百周年記念をとどこおりなく終え、次の百年に向っての初年度でもあり、著名な方のご来賓を予定しています。どうか旧友・知己をお誘い合わせて、多数ご参加下さいますようお願い致します。なお、準備の都合上、お手数ながら九月二〇日までに同封の葉書でご出欠をお知らせ下さい。

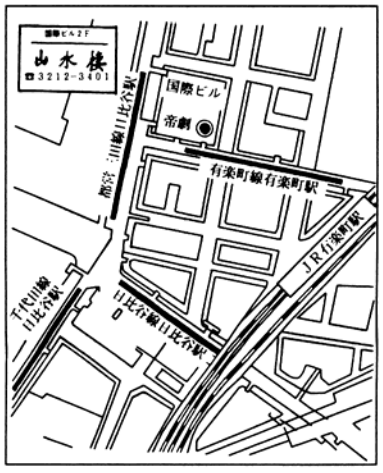
平成十年九月
東京格致会会長　平田耕司

（記）

一、期　日　平成十年十月三日（土）
　　午後二時より

二、場　所　山水楼
　　千代田区丸の内三―一―一
　　国際（帝劇）ビル2F
　　〇三―三二一二―三四〇一

三、会　費　総会費　八、〇〇〇円
　　年会費　二、〇〇〇円
　　学生　三、〇〇〇円



●年会費についてのお願い●　事務局

東京格致会は、平成五年から年会費（年額二千円）をお願いしています。この年会費は、会報の発行、総会・役員会等の会合案内状印刷費用及び郵送料、母校派遣者に対する旅費一部負担、その他経常的運営費用にあてられています。

特に会報の発行は、故郷情報を含め会員の皆さんが最も興味をもたれているだけに今後益々充実しなければならない課題です。そうした内容に支途される年会費ですが、現在七十余名の方々からご協力を頂いていますもののこれら経常的費用を充足していないため、本年度年会費をお支払いなっていない方は是非ともご協力をお願いいたします。

★年会費（二千円）振込先
郵便振替　〇〇一五〇―七―一二九五〇
東京格致会

なお、総会出席者はその際総会費とは別にこの年会費を支払われても結構です。

（編集後記）

今回は、大先輩の方々に、大変ご無理なお願いを致しまして、会報六号を編集致しました。会員の皆様ご感想は如何でしょうか。編集者としては素晴らしい内容の会報が出来上がったと自負して居ります。是非、総会に出席していただいて、ご意見を賜わり次回の参考にさせていただきたいものと思って居ります。

会員各位の親交を深める会報に発展させる為に一人でも多くの皆様方からのたくさんの原稿をお寄せ頂く事を期待して居りますので何卒ご協力をお願い致します。（T）

「東京格致会会報」第六号
平成十年九月一日　発行
発行人　平田耕司
編集人　友広　寿
事務所　東京都千代田区神田淡路町二―一三―二八
　　酒井会計事務所内
　　電話〇三（三二五五）八九九五
連絡所　東京都練馬区東大泉七―一二―二八
　　友広　寿
《振込口座》
◎年会費　郵便振替　〇〇一五〇―七―一二九五〇
　　東京格致会